

映画『風と共に去りぬ』 トリヴィア

——画面に見るアメリカ南部の歴史と文化—— (2)

中 村 紘 一

(前号からの続き)

第2部 アトランタ

アトランタとスカーレットは同年、同じ性格

「1862年5月の朝、北をさして汽車に運ばれながら、おそらくアトランタはチャールストンやサヴァナほど退屈な土地ではないにちがいないと、スカーレットは考えた」。

「彼女はつねにアトランタに他の都市にたいするよりも深い興味をもっていた。それは彼女がまだこどものころ、彼女とアトランタはおなじ年齢だと、父のジェラルドからきかされていたからだ」。

「ジェラルドからきかされた話は、彼女とアトランタが、おなじ年に命名されたという事実にもとづいていた。スカーレットが生まれるまえの9年間、この町は、はじめターミナスとよばれ、つぎにはマーサズヴィルとよばれた。アトランタとよばれるようになったのは、スカーレットの生まれた年からだった」。

「はじめてジェラルドが、ジョージア州の北部に移ってきたころには、アトランタという町は、ぜんぜんなかったばかりか、村落らしいものもなく、そのへん一帯は、未開の、見わたすかぎり広漠たる原野だった」。

「鉄道から生まれたアトランタは、鉄道の発展とともに発展した。4つの路線が完成された結果、アトランタは、いまや西部とも、南部とも、海岸地方とも、またオーガスタを通じて北部や東部とも結ばれるようになった。こうして東西南北

の交通の十字路となり、小さな一寒村はいちやく社会の表面におどりだした」。

「しかも、サヴェアナやオーガスタやメーコンなどがアトランタを非難する理由は、いつも、そのままスカーレットがアトランタを愛する理由でもあった。彼女と同じように、この町も、ジョージア州における古いものと新しいものとの混合であり、そして、そこではしばしば古いものが、わがままで強健な新しいものとの争いに敗退した。そればかりでなく、彼女が命名された年に生れた—あるいは、すくなくともその年にアトランタと名を改めたこの町には、なにかしら個人的な親しみさえ感じられた」。(以上の引用は、ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳(新潮文庫)①第2部8章 pp.296-300.から)。

アトランタははじめ「終着駅」Terminusとよばれていた。それではあまりにも殺風景なので 鉄道会社の名前 the Western and Atlantic Railroad にちなんでアトランタにしたのがその町の名の由来である。

参考

1861年ジョージア州の鉄道地図

(RailGa.com. Georgia's Railroad History & Heritage. c Steve Storey.)



画面26 アトランタ 慈善バザー（舞踏会）

画面26 上



ピティバットの屋敷に身を寄せているスカーレットは「アトランタ陸軍病院慈善バザー（舞踏会）」の手伝いに喪服姿で出かける。

舞踏会の進行役を務めるミード医師の背後の壁には南部同盟大統領ジェファソン・デイヴィス（Jefferson Davis 1808-89、大統領 1861-65）の肖像と南部同盟の国旗、軍旗が掲げられている。

「南部同盟（連合）」the Confederacy（the Confederate States of America）は1861年2月8日、アメリカ合衆国連邦から「脱退・分離」secessionした南部6州（最終的に、1861年12月には13州）が新たに樹立した政府で、大統領はジェファソン・デイヴィス、首都は長らくヴァージニア州リッチモンドにあった。壁に貼り付けられた旗は南部同盟最初の国旗で、7つの星は比較的初期に加盟した7州サウスカロライナ州、ミシシッピ州、フロリダ州、アラバマ州、ジョージア州、ルイジアナ州、遅れてテキサス州）を表す（ジェファソン・デイヴィスの肖像の下に掲げられた旗は13の星のついた国旗）。

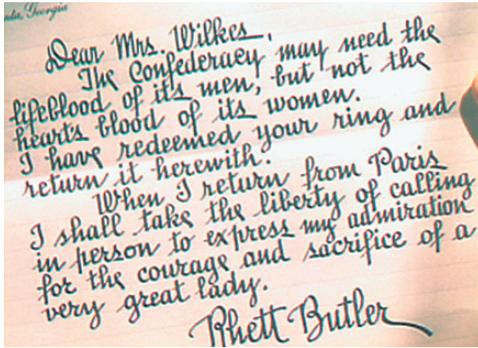
画面26 中



会場に居合わせたレット・バトラーはダンスの相手を選ぶのに奴隷の競売のごとく大金150ドルの値をつけてカーレットを指名。まだ若いスカーレットは未亡人としての振舞いを強いられている鬱憤を晴らすかのように「今夜は（敵の大將）エイブ・リンカーン（大統領）と踊っても構わないわ」と指名を受け、周囲の矚意をもつともせず喪服姿でレット・バトラーと踊りまくる。ダンスは「ヴァージニア・リール」Virginia reel（曲名は“Charleston Heel and Toe Polka”）から始まる。やがてワルツ（曲名は“Southern Belle Waltz”）に変わり、レット・バトラーはスカーレットに言い寄る。曲名はスクリプトには記されていない。原作（小説）ではリールは「ディキシー」（画面27、参照）、ワルツは“Lorena”, “Bonnie Blue Flag”, “When This Cruel War Is Over” の曲名になっている。

「ヴァージニア・リール」とは世界中に最も知られているアメリカのフォークダンスで、映画にあるように男女が向かい合って2列に並んで踊る。起源はキリスト教以前のアイルランドにあり、英国で発展し、英国人によってヴァージニア植民地に持ち込まれ、以後、舞踏会で盛んに踊られるようになった。バイオリンの伴奏とバイオリン奏者の掛け声に合わせて踊る。

画面26下



慈善バザー（舞踏会）で南部同盟兵士が婦人たちに装身具の寄贈を募ってきたのでメラニーは結婚指輪を差し出す。後日レット・バトラーがそれを買戻してやるが、そのときに添えた手紙。メラニー（ウィルクス夫人）の勇気と犠牲を賞賛しているが、スカーレット（ハミルトン夫人）には、追伸で彼女の寄贈した結婚指輪も同封したと事務的に記しているだけである。

"Dear Mrs. Wilkes:

The Confederacy may need the lifeblood of its men, but not the heart's blood of its women. I have redeemed your ring and return it herewith.

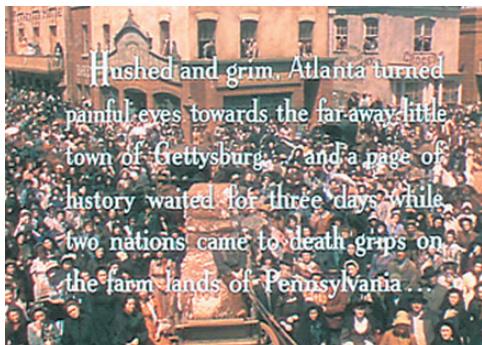
When I return from Paris I shall take the liberty of calling in person to express my admiration for the courage and sacrifice of a very great lady.

Rhett Butler"

"P.S. I also enclose Mrs. Hamilton's ring."

画面27 2年後（1863年）、ゲティスバーグの戦い、アシュリーのクリスマス休暇

画面27上①



それから2年後（1863年）「アトランタは、厳しい顔つきで声も上げず、遙か彼方の小さな町ゲティスバーグに向かって苦痛の目を向けていた…歴史の1頁はこのペンシルヴェニア州の農地で2つの国が雌雄を決する3日間を待っていた」。

Hushed and grim, Atlanta turned painful eyes toward the faraway little town of Gettysburg ... and a page of history waited for three days while two nations came to death grips on the farm lands of Pennsylvania.

「ゲティスバーグの戦い」(the Battle of Gettysburg) とは1863年7月1日から7月3日までの3日間、南北戦争において事実上の決戦となった戦い。この戦いが転機となり、北軍（連邦軍）が優勢になったとみなされている。3日間での死傷者（および行方不明者・捕虜）は両軍合わせて5万人近くにも達した。北軍が勝利して4ヶ月後の1863年11月19日、戦死者を追悼するためにこの地で国立戦没者墓地の奉獻式が行われ、大統領リンカーンが演説をした。それが「ゲティスバーグ演説」(the Gettysburg Address) である。「人民の、人民による、人民のための政治」(government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth 人民の、人民による、人民のための政治を地上から絶滅させない) という一節が有名であるが、これは2つに割れた国家を再び1つに統合することに腐心したリンカーンが、勝利した北部人だけでなく南部人に

も分け隔てなく、すべての「(アメリカ) 人民」(the people) に訴えていることを意味する。

画面27上② 「ディキシー」を演奏する鼓笛隊

アトランタの新聞社『アトランタ・エグザミネー』は戦死者名簿を発行。

悲嘆に暮れる遺族のなかで少年鼓笛隊は南部同盟軍歌「ディキシー」を演奏(ちなみに、この場面はスクリプトにはない)。

名簿にアシュリーの名はなかったが、ミード医師の次男が兄の戦死を知って志願しようとするのをメラニーたちは懸命に思いとどまらせる。



南部を歌ったポピュラーソング「ディキシー」Dixieは別名“I Wish I Was in Dixie”, “Dixie's Land”として知られ、オハイオ州出身のダニエル・エメット(Daniel D. Emmett)の作曲(1859年)と言われている。(顔を黒く塗って黒人に扮した白人芸人が出演する) ミンストレル・ショーで頻繁に唄われて人気を博し、南北戦争では南部の軍歌となった。(黒人英語で書かれている) 歌詞は、オールドサウスを思慕してやまない。以下はその第1連。

“I Wish I Was in Dixie Land”

Oh, I wish I was in de land ob cotton, ああ、あの綿花の地に戻りたい

Old times dar am not forgotten,

Look away! Look away!

Look away! Dixie Land.

忘れられない昔の日々に、

はるか彼方に、はるか彼方に目をやる
のだ！

はるか彼方のディキシースーランドに！

In Dixie Land whar I was born in

Early on one frosty mornin',

Look away! Look away!

Look away! Dixie Land.

霜の降る朝早く

自分が生まれたディキシースーランドに、
はるか彼方に、はるか彼方に目をやる
のだ！

はるか彼方のディキシースーランドに！

Chorus:

Den I wish I was in Dixie,

Hooray! Hooray!

In Dixie Land I'll take my stand,

To lib and die in Dixie!

Away, away,

Away down South in Dixie!

Away, away,

Away down South in Dixie!

コーラス

だからディキシースーランドに戻りたい

バンザイ、バンザイ！

ディキシースーランドに根を張って

生きて死んでいきたいのだ！

はるか彼方の

はるか彼方の南、ディキシースーランドで！

はるか彼方の

はるか彼方の南、ディキシースーランドで！

一方、北軍 (the Union) の行進曲は「リパブリック讃歌」the Battle Hymn of the Republicであった。この歌は1859年に作曲された讃美歌に基づくという説があり、その後、メロディーは、狂信的な奴隷制度廃止論者のジョン・ブラウンの功績を称える歌「ジョン・ブラウンの屍」に用いられ、1861年4月の南北戦争開戦以来、北軍の非公式な行軍曲として兵士によって唄われた。1861年11月、ニューヨーク市生まれの女流詩人ジュリア・ウォード・ハウ (Julia Ward

Howe) は行軍曲に相応しい詩として北軍兵士を讃える歌を作詞した。これは「リパブリック讃歌」と名付けられ、発表されると直ちに北軍兵士の間で最も人気のある歌となった。

以下はその第1連。

“The Battle Hymn of the Republic”

Mine eyes have seen the glory of the coming of the Lord;
He is trampling out the vintage where the grapes of wrath are stored;
He hath loosed the fateful lightning of His terrible swift sword:
His truth is marching on.

(Chorus)

Glory, glory, hallelujah!
Glory, glory, hallelujah!
Glory, glory, hallelujah!
His truth is marching on.

私の眼には神の降臨の栄光が見えた、
神は怒りの葡萄が蓄えられた貯蔵庫を踏みつけている、
恐るべき神速の剣、宿命の稲妻を放ったのだ、
神の真理は行進を続けている。

(コーラス)

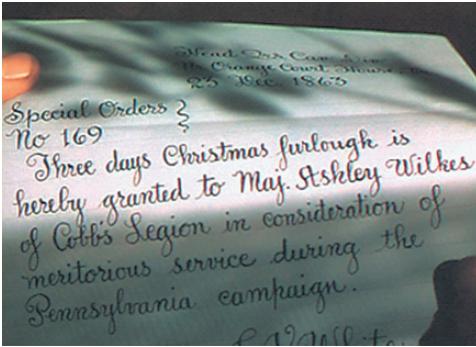
栄光あれ、神に栄光あれ!
栄光あれ、神に栄光あれ!
栄光あれ、神に栄光あれ!
神の真理は行進を続けている。

同じ軍歌でも、「デイキシー」は牧歌的で望郷の念が愛国の主題となっている

のに対して、「リパブリック讃歌」は神の真理、正義、怒りを畏れ、自らの進軍を神の意志とみなすことが愛国の主題となっていると言えよう。

なお、「リパブリック讃歌」は日本には1890年代に讃美歌として紹介され、その後多くの替え歌が作られた。「権兵衛さんの赤ちゃん」や「太郎さんの赤ちゃん」、CMソング「ヨドバシカメラの歌」などがそうである。

画面27中 その年の12月、アシュリーはクリスマス休暇を得てアトランタに戻ってくる。



「ペンシルヴェニア戦役での勲功に免じてコブ隊アシュリー・ウィルクス少佐に3日間のクリスマス休暇を認める。E.V.ホワイト佐官、承認 J.E.B.ステュアート少佐」。

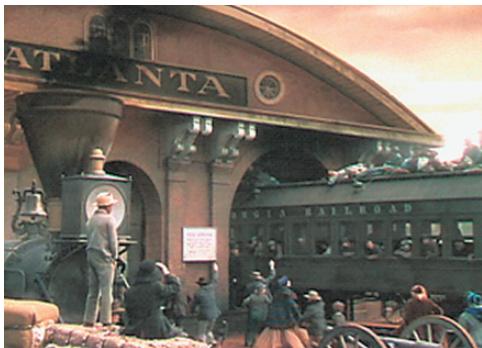
Three days Christmas furlough is hereby granted to Maj. Ashley Wilkes of Cobb's Legion in consideration of meritorious service during the Pennsylvania campaign.

E. V. White Maj. & A.A. Genl. Approved J.E.B. Stuart Maj. Genl. Comdg.

画面27下 アシュリーが降り立ったアトランタ駅

冒頭で小説から引用したように、アトランタは鉄道と兵站の要衝であった。アメリカの交通手段は18世紀後半までは馬（馬車、駅馬車）であったが、19世

紀前半、蒸気船がミシシッピ川、オハイオ川、ミズーリ川に航行するようになり、中西部・南部諸州の発展を促した。19世紀後半、その蒸気船にとって代わったのが鉄道である。自動車の普及（モータリゼーション）は20世紀に入ってからのことである。



画面28 戦時下の女性（銃後の守り）

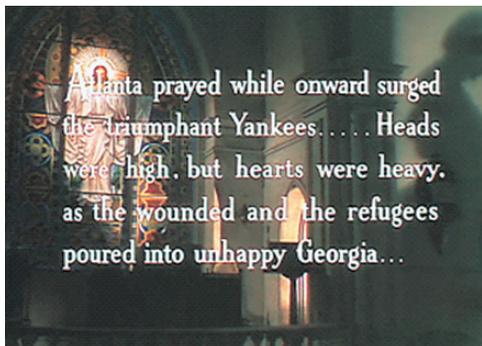
クリスマス休暇を終えたアシュリーは、留守中メラニーの面倒をみることをスカーレットに約束させて、戦場に復帰して行った。今やアトランタ市には、女、子供、老人だけが残された。南北戦争は女性の社会的活動を画期的に促進した。南部ジョージア州でも、女性たちはさまざまな救援団体を設立し、自らの手で衣類、下着、靴、包帯等を製造し兵士たちに送った。

画面28上 裁縫会



アトランタ駅で垣間見えた「裁縫会」 Sewing Society 入会勧誘のポスター。「ジョージア州女性のみなさん！ わが勇敢なる兵士たちは衣類を必要としています。みなさんは武器を持ってなくとも針を持つことはできます」。“WOMEN OF GEORGIA! OUR BRAVE DEFENDERS NEED CLOTHING. You cannot fight! But you can sew!”

画面 28 中



“Atlanta prayed while onward surged the triumphant Yankees ...
Heads were high but hearts were heavy, as the wounded and the refugees
poured into unhappy Georgia ...”

「勝ち誇った北軍が押し寄せてくると、アトランタは神に祈るしかなかった。負傷兵や難民が続々と不運なジョージアに逃れてくるにつれ、人々の頭は垂れなくとも心は沈んでいった」。

画面 28 下 看護師の仕事をするメラニーとスカーレット

銃後の女性たちは、かつては男性の仕事であった看護師となって、負傷兵の世話にあたり、時には手術に立ち会った（スカーレットは恐ろしさのあまり逃げ出したが）。

しかし、このボランティア看護師になれるのは lady に限られていた。ベル・

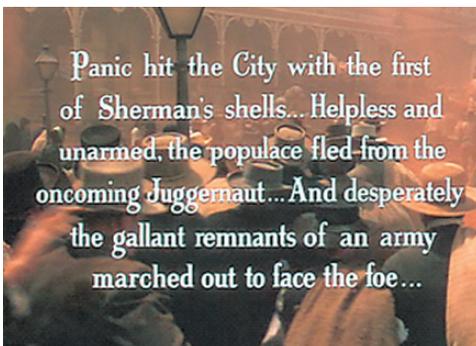
ワトリング (Belle Watling、娼館 [酒場付きの売春宿] の女主人、レット・バトラーの愛人) が看護を志願したとき、ladyたちは自分たちの仲間に入れなかった。仕方なく、ワトリングは献金をしようとするが、不浄の金として拒否されそうになるところをメラニーは感謝して受け取った。ワトリングはメラニーこそ差別をしない真のladyだという。

ちなみに、ladyたちは、画面26にあるように、バザーやフェア（慈善市）、音楽会を催し、病院援助や軍需品供給の基金を募った。メラニーは、画面26のバザーの主催をした。



画面 29 疎開するアトランタ 1864年7月、戦争と技術の進歩

画面 29 上



「シャーマン（北軍）将軍が放った最初の砲撃でアトランはパニック状態に

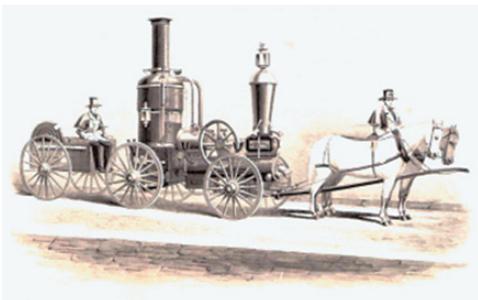
陥った…武器も援助もなく市民は迫り来る怪物から逃げ去った…そして、残った勇敢な兵たちは敵に立ち向かうために決死の覚悟で進撃して行った…」。

“Panic hit the City with the first of Sherman's shells ... Helpless and unarmed, the populace fled from the oncoming Juggernaut ... And desperately the gallant remnants of an army marched out to face the foe ...”

画面29下 砲撃を受けたアトランタの消火に出動する蒸気機関消防馬車。現在の
ような消防車が見られるのは20世紀、自動車が発明されてからのことである。



フィラデルフィア市のヒベルニア消防隊の消防馬車（1859年）



2013年NHK大河ドラマ『八重の桜』では、山本八重はスペンサー銃を使用して活躍した。その経緯は1865年、南北戦争が終結し、不要となった武器の多くがアメリカから日本へもたらされ、明治元年（1868年）、それらを装備した

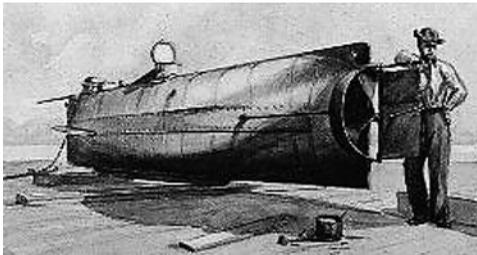
新政府軍の攻撃にさらされた会津若松城で、八重は最新式のスペンサー銃を手に徹底抗戦したのであった。

南北戦争は最初の「近代戦争」としばしば言われるが、当時もっとも進歩した技術や発明が利用されたからである。例えば、スペンサー銃などのさまざまなライフル銃、連発銃、装甲艦（南部の一部では潜水艦すらも）、電信、そして、交通手段としての鉄道がそうであった。

1865年 スペンサーライフル銃



南北戦争で南軍が建造した潜水艦「H.L.ハンリー号」（1863年アラバマ州で建造。1864年2月サウスカロライナ州州チャールストン沖を封鎖していた北軍の戦艦「フーサトニック号」を水雷で沈め、潜水艦として史上初めて敵艦を撃沈したが、爆発の衝撃でみずからも乗員と共に沈んだ）。



画面30 The Yankees are coming! 「北軍が攻めてくる！」1864年8—9月

遠くで砲声が間断なく轟く。一発が通りに落ちて爆発、地面に大穴があき、街灯は倒れ、馬が驚いて暴れる。

画面30上

そんな折り、ピッケルとシャベルを担いだ黒人奴隷の隊列が通り過ぎた。先頭はタラ農園の奴隷頭ビッグ・サムであった。彼らは主人の命令で南軍のため

に塹壕掘りに駆り出されたのだ。一説によると、南軍黒人兵の数は3千から1万（これは兵役年齢に該当する南部全黒人の1%未満、南軍兵全員数の1%未満）、労役に動員された黒人の数は2万から5万という。



この画面のサウンドトラック（BGM）は黒人霊歌「行け、モーセ」である。

<i>Go down, Moses,</i>	行け、モーセ（モーゼ）
<i>Way down in Egypt's land,</i>	エジプトの地に下り
<i>Tell old Pharaoh,</i>	ファラオに告げよ
<i>Let my people go.</i>	わが民を解放せよと。

（旧約聖書、出エジプト記、7：26）

ここでは「わが民」とはイスラエル人＝黒人奴隷、「ファラオ」は奴隷主、「エジプト」は奴隷制のアメリカ南部を示唆する。なお、エジプトは他国より低地にあるためにdownの言葉が使われているが。アメリカ南部にあってはミシシッピ川下流を意味し、そこでは奴隷虐待はいっそう激しかった。それにしても、南軍のために駆り出された黒人奴隷たちの行進にこの曲が使用されているのは皮肉である（この歌はcontrabandと呼ばれた北軍側へ逃げた[連行された]奴隷たちによって通常歌われたからなおさらのことである）。

画面30中

「包囲」Siegeのスク립トに続いて、「空から死の雨が降ってきた。35日間、

砲撃にさらされたアトランタは奇跡を望んで、ひたすら持ちこたえた」。

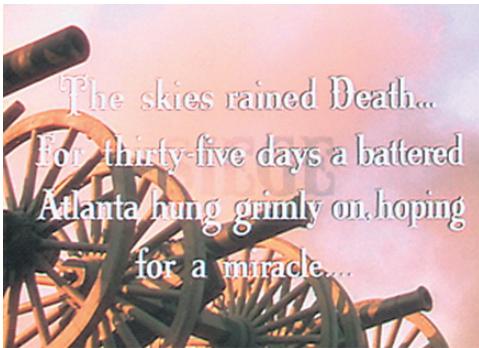
そして、「そのあと、砲撃よりもっと恐ろしい…沈黙が訪れた」のスク립トが続く。

“SIEGE”

“The skies rained Death ...

For thirty-five days a battered Atlanta hung grimly on, hoping for a miracle ...”

“Then there fell silence ... more terrifying than the pounding of the cannon ...”



画面30下 メラニーが産気づいたために、スカーレットはミード医師を探しにアトランタ駅前広場に行く。そこには無数の南軍負傷兵が運ばれてきて炎天下に放置され、苦痛のあまり呻き絶叫していた。そのありさまは阿鼻叫喚の地獄



であった。一方、空高くその光景を俯瞰して、旗竿に南部同盟の国旗がはためいていた。地上の阿鼻叫喚は戦争の現実を、空にたなびく南部同盟国旗は戦争の大義名分の虚しさを表す見事なショット。

そのうえ、このショットのBGMとしてステイーヴン・フォスター (Stephen Collins Foster ペンシルヴェニア州生まれ、1826-64) 作詞作曲の「故郷の人々 (スワニー川)」("Old Folks at Home", "Swanee Ribber" 1851) のメロディーが流れてくる。この歌の歌詞は黒人奴隷が「懐かしのプランテーションを慕う」"longing for de old plantation"と唄う。やはり、南部同盟の大義の虚しさ、「オールドサウス」の文明の切なさが伝わってくる。

"Old Folks at Home"

Way down upon de Swanee Ribber,
Far, far away,
Dere's wha my heart is turning ebber,
Dere's wha de old folks stay.
All up and down de whole creation
Sadly I roam,
Still longing for de old plantation,
And for de old folks at home.

Chorus

All de world am sad and dreary,
Eb-rywhere I roam;
Oh, darkeys, how my heart grows weary,
Far from de old folks at home!

(Way down upon the Swanee River, Far, far away
That's where my heart is yearning ever, That's where the old folks stay
All up and down the whole creation, Sadly I roam
Still longing for the old plantation, And for the old folks at home

Chorus

All the world is sad and dreary, Everywhere I roam
Oh, brothers, how my heart grows weary, Far from the old folks at home)

はるかスワニー川へと、遠く、遠く
そこはいつも心が向かうところ
そこは懐かしき人々がいるところ、
この世のあちこちを
一人悲しくさすらう、
今なお慕いつつ
懐かしのプランテーションを
そして故郷の人々を。

コーラス

この世はどこも悲しくわびしい
いずこをさすらおうとも、
ああ、黒人の仲間たちよ、分かるだろう、わたしの憂いが暮るのが
故郷の人々から遠く離れてさすらえば。

ちなみに、日本で「故郷の人々」として親しまれている堀内敬三訳詞（遙かなるスワニー河岸辺に/老いしわが父母われを待てり/果てしなき道をばさすらう/身にはなお慕わし里の家路/さびしき旅を重ねゆけば/ただ懐かし遠きわが故郷）では、黒人奴隷がプランテーションを懐かしむという設定は当然のことながら完全に無視されている。

画面31 メラニーの出産、アトランタ脱出、アトランタ炎上、タラへ

画面31上 負傷兵の治療に忙殺するミード医師にメラニー出産の往診を断られたスカーレットは、お産の知識があると言った黒人奴隷娘プリシーも嘘をつい

ていたことを知って、結局、ひとりで出産を取り仕切る。プリシーに湯を沸かせさせ、麻糸やタオルや臍の緒を切る鋏を用意させる。その結果、メラニーは無事男の子を出産、「ボー」"Beau"と名付ける。原作の小説では、スカーレットはすでに亡夫ハミルトンとの間の男の子ウェイドを出産し、現在（ウェイド2歳）いっしょに住んでいることになっている。



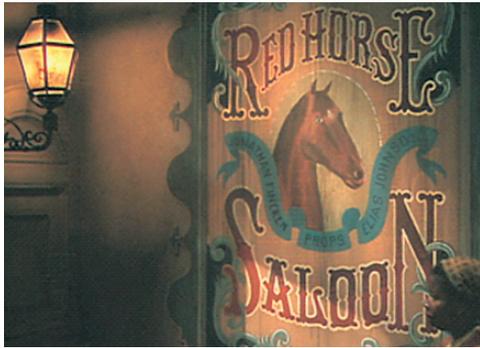
画面31中

スカーレットはメラニー母子とプリシーを連れてアトランタを脱出し故郷タラに向かう決心をする。そのためにはレット・バトラーの助けが必要で、プリシーを彼の滞在するサルーン (saloon) に使いにやる。

サルーンの名は、「レッドホース」(赤い馬)。経営者は先に慈善バザーに献金を申し出たがladyでないという理由で断られたことのある（そして、レットの愛人でもある）ベル・ワトリング。レットが窓から2階に上がって話をするようにと言うと、プリシーは「ワトリングさんの館に入ったら、おっ母にトウモロコシの軸で叩きのめされる」と尻込みする。婦女子が足を踏み入れてはいけない店だったのだ。

サルーンはもともと酒場であり、アメリカ西部の開拓では、たいていの場合教会とともに町にできた最初の建物であった。入口にはコウモリの翼 (batwing) に似た自在扉が付いているのが典型的なサルーンの外観で、店内ではバーテンダーが酒を出したが、踊り子による余興があり、彼女たちは時には、あるいは、

日常的に売春婦を兼ねるサルーンもあった。



画面31下

レットは荷馬車を見つけてきてスカーレットたちのアトランタ脱出を助けるが、すでに北軍の襲撃を受けたタラ農園に向かうことは危険極まりないと警告。しかし、スカーレットの帰郷の意志は固い。

アトランタ残留の南軍兵は攻めてくる北軍に利用させまいと残された弾薬を次々に爆破したので、街は一面火の海となる。怖気づく馬に目隠しをして、レットは必死に荷馬車を引き、まだ炎が届いていない操車場へと向かう。その一瞬後、有蓋貨車の中の爆薬が爆発し始め、それは一番高い建物に燃え移り、天から地まで炎の幕となり、やがて崩れ落ちる。この映画最大のスペクタクル。



画面32 レットの志願、逃避行、タラは無事か？

一行が危うく難を逃れてタラへの道を歩むと、レットは炎上するアトランタを振り返り、「よく見ておくのだ、歴史的瞬間を。オールドサウスが一夜にして消えたのを目撃したと孫たちに語ってやるのだ」、「勇ましい哀れな愚か者たちは1ヶ月でヤンキーをやっつけると威張っていたのに」としみじみ語る。スカーレットは「あの連中にはうんざりよ」と同意する。レットもスカーレットも戦争の虚しさ、そして、それを厭う気持ちは強い。そう言えば、アシュリーも「この世の悲惨のほとんどは戦争が原因だ。そして戦争が終わってしまえば、何のための戦争だったか判らなくなる」(“Most of the misery of the world has been caused by wars. And when the wars were over, no one ever knew what they were about.”)と述べていた(画面21参照)。

画面32上

それにもかかわらず、突然レットは敗色濃い南軍に今から志願するつもりであると宣言。そして、死にゆく兵士の自分に美しい思い出を残して欲しいと、スカーレットにキスを迫る。スカーレットは自分たちを見捨てて行く身勝手さに腹を立てつつも、一瞬、レットに抱かれる。2人のラブシーンで最も美しいショットの1つ。

画面32中

レットが去って行ったあと、女手だけのタラのへの逃避行が始まる（夜）。夜明けには激しい雷雨に襲われ、荷馬車ごと橋の下に避難。橋の上を北軍の隊列が通りすぎる。暑い真昼時になると空にハゲタカが飛び交うのは、あたり一面、南北両軍の兵士たちの死体が転がっているからだ。疲労と空腹に苛まれながら、夕暮れにようやく「トゥエルヴ・オークス」の館にたどり着くが、館はすでに焼け落ちていて、農園主ジョン・ウィルクスの建てられたばかりのみすぼらしい墓標が見えた。



画面32下



いよいよ「タラ」の館である。フクロウの声を耳にしなが、暗闇の中、歩を進める。雲が動き月は顔を見せて、館を照らし出した。スカーレットは歓喜

の叫びをあげる。「無事だったわ！焼かれてはいない！まだあるわ！」（“It's all right! It's all right! They haven't burned it! It's still there!”）。

かくして、アトランタからタラの大農園のある（と想定されている）ジョーンズボロまでの一昼夜の逃避行は終わった。その距離25マイル（40キロメートル余り）の行程だった。画面25の地図参照。

画面33 廃墟、空腹、誓い、3度繰り返される重要なシーン—その2（画面9参照）

しかし、何とかタラは残っていたものの事情は一変していた。母は病死してベッドに寝かされており、父は正気を失い、働き手の奴隷たちは出征あるいは逃亡して残るは2人だけだった。北軍はタラに司令部を置き、引き上げるときには食料・貴重品を略奪して行ったのだ。

画面33上

黒人奴隷居住区（slave quarters）では、北軍兵が火をつけたために黒焦げになった奴隷小屋（cabin）や樫の木が立ち並んでいた。



画面33中

唯一残された食料は菜園に植えられた大根だけだった。スカーレットは打ち

ひしがれ、泣きじゃくりながら、かがみ込んでそれを引き抜き、土がついたまま口にする。

「これはスカーレット・オハラの人生で一番落ち込んだ瞬間である——彼女は完全に挫折しているとわれわれは感じなければならない」(スクリプトより)。

そして、スカーレットは立ちがある。

「これはスカーレット・オハラの人生で一番大事な瞬間である。彼女の人生で一番荘厳な瞬間である。この完全な挫折から、新しく大人 (mature) になったスカーレット・オハラが誕生する」(同)。



画面33下

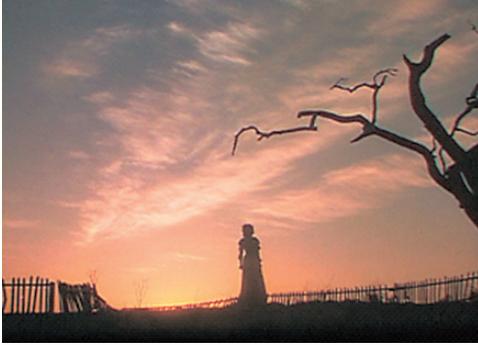
彼女は焦げた大きな樫の木の側で夜明けの空に向かって叫ぶ。

「神かけて誓うが、わたしは負けない。この戦争を生き延びてみせ、それが終わったときわたしや周りのものが再び飢えるようなことは決してさせない、たとえ嘘をつき、盗み、騙し、人を殺さねばならないとしても」(“As God is my witness ... They're not going to lick me! ... I'm going to live through this and when it's over I'll never be hungry again ... No, nor any of my folks! ... if I have to lie - steal - cheat - or *kill!*”)

このシーンは画面9に続いてこの映画で「3度繰り返される重要なシーン」の2つ目である。1番目(画面9)のシーンの時刻は日没・夕焼け (sunset) 時で

あったが、ここ（画面33）のそれは夜明け（dawn）である。新しい日の誕生と新生スカーレットの誕生が符合している。

原作（小説）ではスカーレットがこの決心をするのは廃墟になったトウェルヴ・オークスを目撃しながらタラ農園に向かう道すがらである。



以下次号に続く。